

青空に恵まれ (10月13日)
 大阪本部「秋之例大祭」厳粛に挙行
 —前日よりの台風19号の進路、災害を気遣いつつ—

ご教話
 「天皇ご即位にあたり、御教祖への御神勅を大切に。」

教信徒の皆様、本日は、寶生教大阪本部、秋之例大祭ようこそご参拝下さいました。

西播教母様、養老教会長様を筆頭に、ご家族、教徒の皆様、又東は関東、東海、西は九州、中国地方、そして畿内、大阪府下、市内近郊の本部教信徒の皆様、道の長手も一筋に、熱心なご参拝、心より敬意を表します。

皆様の熱意は、必ずや、大神様、御教祖様、各家ご

祖先様方の御心に届き、大いなるご守護の皆様を包んで下さることでしよう。

扱、来たる十月二十二日には、天皇陛下の即位礼正殿の儀が、宮中に於いて執り行われます。

この儀式は、天皇陛下ご即位の一連の行事の中でも中心的な儀式で、ご即位された天皇陛下が、国内外に對し、ご即位を宣告される儀式です。

この儀式には、二〇〇近くの外国の元首や使節が、



ご教話なさる大阪本部長様



大祭奉納舞楽「五常楽」 蛸絵装束の刺繍も鮮やかに。舞人は、西田清美さん藏楽貴子さん、西田のぞみさん、木本裕子さん。

この「御靈動」を更に磨いて、自分の心を最も深い所に落ち着けて、大神様に



発行所 寶生教大阪本部
 大阪府西區北堀江3丁目10番
 電話 06(6531)6722
 FAX 06(6531)6152
 (非売品)

11月号

自家成立の
 根源は和にあり
 秩序の根源は
 神祖崇敬より

祝祭日には必ず国旗を掲揚しましょう

寶生教 国旗掲揚運動

分頃より行われるそうです。その即位礼正殿の儀の会場である皇居宮殿の中庭には、色とりどりの錦の御旗が飾られるのですが、その中に、「際鮮やかな「萬歳」と書かれた「萬歳」が飾られます。

私達にも馴染み深い、この「萬歳」ということば。その意味は、「長い年月」、「いつまでも栄えること」という意味で、私達の祖国「日本」で最初にその記録が見られるのは、「日本書紀」—雄略天皇の頃—だと

明治神宮の解説に載っております。

今回のご即位にあたり、この「萬歳」の文字を揮毫されたのは、私達国民の代表である安倍首相です。

その萬歳の意味通り、天皇陛下、皇室が永々と栄えられ、それと共に国家の発展、国民の安心した生活が保たれることを念じて止みません。

扱、先日、十月九日は、私達の大切な、御教祖様の祥月命日でありました。

云うまでもなく、御教祖様が神がかりされて、この私達の寶生教が立教された訳ですが、それが、かの明治天皇崩御とほぼ同時刻で、「明治帝なき後、乱れる人心を正し、神と明治の御代の心持ちを広く世に知らし召せ」との御神勅を受けられました。

その為、御教祖は、身太氣神自教の極意として、「神自教伝修行」を残してくださいました。

このお蔭で「行」を積み、信徒一人々に到る迄、神様の御心に触れることが出来るのです。それが体の動きとなって現れるのが「御靈動」です。

令和2年度
 『月並運勢表』
 申込み受付(11/15~12/15)

教信徒の道しるべ。各家の来年度の月並運勢表を、左記の通り受付致します。

記
 一、教会所定封筒に住所、氏名、職業(具体的に)、来年の数え年を書きし、申込み幣帛料(金七萬円)を中に入れて、開封のまま教会事務所へお出しください。

開封のまま
 住所
 氏名
 職業
 来年の数え年
 (教会所定の封筒)

一、申込みは教信徒で維持費納入者に限ります。
 一、申込み期日は、十一月十五日より十二月十五日までです。
 ※新入会の方、初めて申込みされる方は、詳細等を遠慮なく教会事務所に、お聞きください。

一、申込みは教信徒で維持費納入者に限ります。
 一、申込み期日は、十一月十五日より十二月十五日までです。
 ※新入会の方、初めて申込みされる方は、詳細等を遠慮なく教会事務所に、お聞きください。

一、運勢表の授受は、令和二年元旦です。
 ※新入会の方、初めて申込みされる方は、詳細等を遠慮なく教会事務所に、お聞きください。

一、運勢表の授受は、令和二年元旦です。
 ※新入会の方、初めて申込みされる方は、詳細等を遠慮なく教会事務所に、お聞きください。

十一月(金)	月並祭	午後七時
十一月(祝)	西播教会秋之大祭 (開教会八十五周年 御本殿建立五十周年 記念)	午前十時半
八月(金)	修行日	午前十一時、午後七時
九月(土)	修行日	午前十一時
十月(日)	教祖祭	午後七時
十月(日)	七五三参り 祭典	午前十一時
十一月(金)	宝生会(ザ・C.C.) 月並祭	午後七時
十一月(祝)	養老教会修行日	
十二月(土)	東京地区敬和会 修行日	午前十一時、午後七時
十二月(日)	名古屋地区敬和会 修行日	午前十一時、午後七時
十二月(日)	米子地区敬和会 月並祭	午前十時
十二月(日)	西播教会修行日	午前十時
十二月(日)	御本宮月並祭	午前十一時半
十二月(日)	御本宮通拝式	午前九時
十二月(日)	御本宮通拝式	午前十一時
十二月(日)	御本宮通拝式	午後七時

に載っております一枚の写真。題は「大阪本部建國祭(昭和十二年二月十一日、野田小学校にて)」とあり、御教祖も写っておられます。

その写真の中に「神政復古」と書かれた旗が掲げられているのが見られます。社会の授業で習いました「王政復古の大号令」。おそろくそこからヒントを得て、この「神政復古」、即ち「神が政(まつりごと)を行う、もとの姿に戻す」ということに、力を注がれていたのではないかと拝察した次第です。

つまり、天皇陛下が、日本の大元首として國を導き、神の御心の随に政が行われ

る。これこそが、本来日本の歩むべき正しい姿ではないかと存じます。

その本来の姿を取り戻し、日本古来の神道の精神を、

世に広めよと、この教えを御教祖が残してくださった訳でございます。

大神様、ご祖先のご守護に報いるためにも、そして

学生さんは試験前などに唱えますと落ちていて受験できませんし、社会に出てからも、要所所で唱えますと、より良い道を選択させて頂く事が出来るものです。

しかし、祝詞を奏上するだけでは無く、やはり修行日にお参りされ、修行を受けて頂くことが大切です。

一、申込みは教信徒で維持費納入者に限ります。
 一、申込み期日は、十一月十五日より十二月十五日までです。
 ※新入会の方、初めて申込みされる方は、詳細等を遠慮なく教会事務所に、お聞きください。

そうすることで、更なる大きなお徳を授かり、最大限の力を発揮することが出来るのです。

扱、話を御神言に戻します。今年三月十五日の、月並祭の日、御神言の一行目についてお話し致しました。「寶生」四月号に掲載。本日は「威実真統護國精神」、この一行は、人づくりの祝詞であります。

一、申込みは教信徒で維持費納入者に限ります。
 一、申込み期日は、十一月十五日より十二月十五日までです。
 ※新入会の方、初めて申込みされる方は、詳細等を遠慮なく教会事務所に、お聞きください。

むらくも 雪の寒籠りと耐えるが人の世。真：真こそ神に通ずる近道で、素直であれ正直であれ。

護：護るは 守られること、法を犯すな 規則を超えな。

国：国あつて国民あり、教えあつて信徒あり、愛

国愛教精神を盛り挙げよ。

精：精出せば貧乏の禍津神も居づらくて、福之神と交替をする。

神：神は絶対なり。神に愛され神自教伝利生の徒となれ。

どうぞ日々の生活の中で、気を込め、しっかりと唱えて下さい。必ずや大神様が大きなご神力を授けて下さいます。

ご教話 御神言
 「威実真統護國精神」

月並祭 (10月1日)

教会行事

物事をお聞きすると「御神宣」が出来るのです。その為には、教会、各地方敬和会で行われる「修行」を受け続けて頂かなければなりません。

この尊い神様からの「お力」は、個人の利益の追求ばかりに使っていいというものではありませんよ。広く世のため、国のため、人助けにこそお使い頂き、それが神様の存在を世に広め、教えの発展、御教祖様の受けられた御神勅にお応えすることに繋がるのです。

では「御霊動」の無い方は、その御神勅に込められていないのか。決してその様な事はありません。ご自分方のお仕事、自分たちの利益だけでなく、社会のために、人助けに繋がる様にと、強い信念を持って祈り、努力して



祭主に先立ち 玉串奉奠される教父様



「奉祝・御大典」の幟も掲げられた御本殿

事にあたれば、人一倍の利益、成果が上がるものです。冒頭に申し上げた通り、

話 御教祖の遺業を噛締め 更なる強い信念を。

皆様こんにちは。本日は御教祖の祥月命日です。七十周年記念誌に掲載されております御教祖の記事をご紹介します。

「御教祖はのちに、藤原如流あるいは神風軒晴雲と称されることもあったが、もとのお名前は山本亀一と申された。明治元年（一八六八年）四月二十一日にお生まれになった。八か月余りの早産であったために、幼少のころは病弱であったという。

皇室、教えの発展を家族、親戚に諭す。これも大きなご恩返しになるのです。これも又、常々申し上げております通り、自分の為だけでなく、他人の為に祈る、その事に通ずるのです。そう云った心のゆとり、身太氣神風が吹き込み、大いなる神の徳に預かる事が出来るのです。

教信徒皆様の益々のご発展、ご繁栄を心よりお祈り申し上げ、本日の挨拶と致します。

最後にになりましたが、台風の中、数日来ご奉仕頂き、また、総代様始め役員、



大祭直会、余興。発足七十年を迎えた青年部の喜びを披露。

有志の皆様のお陰で大祭が斎行できました事、改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。

祭 祖 祭 (10月9日)

青年期の御教祖は向学心が強く、和歌とおして社会勉強をしようと十七歳ごろに京都へ行つて、花本十

一、世不識庵先生のもとで勉強をされた。今日のようにな組織だった学問にふれる機会がない時代のこと。地方の有識青年層の関心を集めていたのが和歌だった。京都へ行くといつても、当時、村にはまだ自動車も通

っていない。東海道本線を利用するには、まず富士川を帆掛け舟で下るしかない。村から京都へ勉学に行くという事は、今でいうなら海外に留学する様な感覚であろう。そうしたことから考えても、御教祖が経済的に恵まれた環境におられたことがうかがえる。

そのころ京都の蹴上では、琵琶湖疎水の建設に並行して、日本初の水力発電事業が進められていた。それを

見聞された御教祖は、のちに村に戻って「今に水が火になるぞ」と村人たちに話されたが、村人たちは驚いて、「京都へ行って頭がおかしくなったのでは」と噂するばかりであったという。

琵琶湖疎水は明治二十三年に竣工し、翌年、水力発電所も操業を開始、その電力で京都市内に街灯を灯し

明治二十八年には国内初の路面電車市街を走り始めた。後日、村の人たちもそれを知り「水が火になるといふのは、なるほどさういふことだったのか」と合点したのだ。もう一つ、御教祖が京都から持ち帰られたものに、道路の普請がある。碁盤の目のように整備された京都の町並みに比べて、自分の

村は道という道が曲がりくねり、不自由なことこのうえない。「村を発展させるには、まず道路を整備すべきだ」と村の人たちを啓蒙し、山や田畑を手放して得られた資金で、村の中に直線の通りをいくつも造られたのである。

そのことは長く村の古老の語り草となり、二代大阪本部長山本真道様が御本宮に行かれた折に「村の道が真つすぐに通っているのも、あなたのおじいさんに造っていたのだお陰なんですよ」と感謝されたという。

明治二十年、二十歳になった御教祖は、のちに御教母となられる木内よね様（明治二年八月十五日生まれ）とご結婚された。明治二十三年にはご長男の徳佳様が誕生。お二人は九人の子どもをもうけられた。

神がかりされる以前の御教祖は農業をなさっておられた。生来霊感が強く、

時から「あなたの身体はここが悪い」と言い当てられたことがたびたびあった。たとえば、胃が悪ければ胃のあたりが黒く見え、頭痛がすれば頭が黒く見えるという具合である。未来を見通す力も持っておられた、通りがかりの人に「あなたは将来こうなりますよ」「こ

御本宮 秋之大祭(十月六日) 総本部長ご教話「気を充填せよ」

皆さんこんにちは、本宮の秋の大祭によるご御参拝をくださいました。お陰様で滞りなく祭典を執り行うことが出来、深く感謝申し上げます。

なお本日の祭典に際しまして祭員は中京本部、また奏楽は東京本部の方々に御奉仕をいただきました。誠に有り難うございました。誠に有りで今年も亦、台風に依る被害が各地で多発いたしております。

先日の千葉県を縦断した台風十五号、その折りに当地在住の方々が長期間に亘って不便な暮らしを強いられたこと。無論、電気水道等の生活基盤の壊崩は言うを俟ちませんが、因みに取っ置き思慮することは、普段私共が何気なく吸っております其の空気、若し夫れが汚染されでも為たら如何なるか、大変だ。程度では済ませられない由々しい事態が惹起致すであります。それ程に至る要なる空気、

「け」とも読むことが出来ること。してその「気」に共通する訓であるのが「食」と云う文字でございます。

謂う所から神様に御供えを為る食べ物のことを「御食」と称し、祝詞等では御饌・神饌とも書き表わしますが、更にその上に「御」の字を被せて「御食」と言

「け」とも読むことが出来ること。してその「気」に共通する訓であるのが「食」と云う文字でございます。謂う所から神様に御供えを為る食べ物のことを「御食」と称し、祝詞等では御饌・神饌とも書き表わしますが、更にその上に「御」の字を被せて「御食」と言

御本宮 月並祭 毎月第一日曜日 午前十一時半より

「御嶽神自教会」―神自ら教える教会。そう看板を掲げて、甲府での布教は始まった。御教祖の私心のない人柄は多くの信徒の尊敬と信頼を集め、病氣快復を願う人々の訪れは絶え間なかった。

大正七年七月十四日。御教祖は甲府をあとにし、東京台東区浅草橋(当時は東京市浅草区猿屋町)に新たな布教の足がかりを定められた。さらに多くの人々に教えを広めよという大神様のお告げによるものであった。

「御嶽神自教会」―神自ら教える教会。そう看板を掲げて、甲府での布教は始まった。御教祖の私心のない人柄は多くの信徒の尊敬と信頼を集め、病氣快復を願う人々の訪れは絶え間なかった。

のようになってはどうか「すか」と進言されることもあった。さらに、相手の患っているところに手を乗せたりさすったりすると、不思議に病気が治る。実の子どもたちからも「ありがた

山本家は菩提寺である常安寺の檀家総代を代々務める家柄であったため、父親の徳平様が逝去されてから、御教祖が代わって檀家総代を務めておられた。とくに宗教心が篤かったというわけではなく、日々の暮らしにおいては、神様とは縁がなかったといつても過言ではない。しかし若いころから、天皇陛下を思い、国を思うことを非常に大事にしておられたという。

明治天皇の崩御と同時に神懸かりになられた御教祖は、まず伊豆の伊東、下田へと足を運ばれた。神懸かりになられたばかりで、まだ祝詞はご存知ではなかったが、青年のころより親しんでこられた歌を詠んで、行き会った人々の病気の治療や祈願達成を助けられたという。

たというエピソードが残されている。距離にして百数十キロメートルを徒歩で行かれたというから、まさに神懸かりというほかない。そして、その地で杖を突き立てられ、「ここに温泉が出る」とおっしゃると、その言葉通り、国道脇に温泉が湧き出たのだという。

御教祖は伊豆から戻られると、八幡神社の神官をしていた山本富五郎様の紹介で御嶽教大嶽山教会の長田勇二郎教会長に労を取ってもらい、大正元年十月十五日、御嶽教の教師を拝命された。当時、布教には教師の資格が必要とされたためである。

その後、再び農業の仕事に戻られたものの、鋏で土を耕そうとすると鋏の先が飛ぶ、草刈鎌を持てば柄が折れるというように不思議なできごとが続く。悩まれた末、「私が神様の子にならねば世の中はよくならない」と御神命を悟られ、田畑は御教母と子供たちにかせ、単身東京へと出府された。

「御嶽神自教会」―神自ら教える教会。そう看板を掲げて、甲府での布教は始まった。御教祖の私心のない人柄は多くの信徒の尊敬と信頼を集め、病氣快復を願う人々の訪れは絶え間なかった。

大正七年七月十四日。御教祖は甲府をあとにし、東京台東区浅草橋(当時は東京市浅草区猿屋町)に新たな布教の足がかりを定められた。さらに多くの人々に教えを広めよという大神様のお告げによるものであった。

「御嶽神自教会」―神自ら教える教会。そう看板を掲げて、甲府での布教は始まった。御教祖の私心のない人柄は多くの信徒の尊敬と信頼を集め、病氣快復を願う人々の訪れは絶え間なかった。